

< 2018年1月 >

古賀 順子

「救世軍と収容施設」

暖かい新年を迎えたパリですが、曇り空と雨の日々が続いています。

1月上旬の雨の午後、パリ 20 区フレール・フラヴィアン通り 60 番地にある救世軍フランス本部を訪れました。フランスとベルギーの救世軍代表を兼任されているダニエル・ノー大佐(救世軍は、階級制で、制服があり、旗を掲げ、階級に応じたバッジを着用)との面会です。

1865年ウイリアム・ブース(1829-1912) がロンドンで伝道を始め、1878年「救世軍」の名前が生まれ、世界中にその活動が広がり、今では100ヶ国を超えています。フランスでは、創始者ウイリアム・ブースの娘カトリーヌ・ブース(1858-1955。母親の名前もカトリーヌ)が伝道師として海を渡り、カトリックの国フランスでプロテスタントのハンディを乗り越えて、1881年から正式に活動を続けています。ノー大佐の部屋には、創始者ウイリアム・ブースの言葉「苦しみに出逢う度に、私は自問せずにはいられない。その苦しみの原因は何か、その苦しみを癒すために私に何ができるか」とブースの写真が壁に掛けてありました。

130年を超えるフランス救世軍の活動は、ホームレス、失業者、幼な子を抱える未婚の女性、社会復帰と闘う人々、移民審査を待つ難民など、社会から見捨てられた貧しく、弱い人々を収容する施設を一つでも多く持つ歴史でもありました。とくに、1925年から1939年にかけて、パリを始め、フランス各地で建設・購入が積極的に行われています。

パリ市内では、13区「避難都市、希望センター (Cité de Refuge - Centre Espoir)」(カンタグレル通り 12 番地)。当時 500-600 人を収容する目的で、ル・コルビュジエが設計した鉄筋コンクリートの建物で、建設当時はその大きさとコンクリートというスピーディに建設できる新建材の「未来派」建築として時代を画して

います。

同じく 13 区コルドリエール通り 29 番地「人民館 (Palais du Peuple)」は、第一次世界大戦で疲弊し、住まいを失った人々を収容すべく、1924年、救世軍がゴブラン織り工場の跡地を買い取り、建設されます。ポリニャック公爵夫人の援助のおかげで、ル・コルビュジエ設計による建物が 1927 年 6 月に完成。470 人を収容できる大規模の施設が完成しました。

11 区シャロンヌ通り 94 番地「女性館 (Palais de la Femme)」は、名前の通り、当時は存在していなかった女性専用の受入れを目的に 1926 年購入。1910 年男性独身者のために建設された建物でしたが、第一次世界大戦で独身男性が戦死し、女性収容に変更されます。その他、11 区クレスパン・デュ・ガスト通り 15 番地にある「カトリーヌ・ブース・レジデンス (Résidence Catherine Booth)」でも受入れを行なっています。パリ以外にも、フランス各地に 9 ヶ所のお城や館を収容施設として保有しており、規模の大きな活動を続けています。

また、地上の建物だけでなく、セーヌ川に浮かぶ船でも浮浪者やホームレスの受入れを行なっています。1929 年ル・コルビュジエが改造した平底船「ルイーズ・カトリーヌ号」では、第二次世界大戦の間を除き、90 年代まで、一夜の宿として、100 人を越えるホームレスを受入れ、夕食とベッドを提供してきました。2008 年「ルイーズ・カトリーヌ号」は売却されましたが、今度はヌイイ・シュル・セーヌの「ジョルゼット・ゴディビュス提督号」(ゼネラル・クニグ通り 15 番地)を買取り、セーヌ川に浮かぶ新たな避難所としての役割を受け継いでいます。

『当時は、二段ベッドのぎゅうぎゅう詰めでも可能な限り収容していましたが、今日はそうはいきません。プライベートを尊重した個室、家族の部屋など、収容施設も時代と共に大きく変化しています。しかし、苦しんでいる人に手を差し伸べる精神は、今も少しも変わりません。』と、ノー大佐が謙遜した口調で語られたのが印象的でした。